様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：３０１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０１４４

研究課題名（和文）翻訳研究（トランスレーション・スタディーズ）のアプローチによる英米文学受容研究

研究課題名（英文）A Study on the Reception of English Literature by an Approach of Translation Studies

研究代表者
佐藤　美希（Sato, Miki）

札幌大学・地域共創学群・准教授

研究者番号：５０５０７２０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,600,000円、（間接経費）　480,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、翻訳研究（トランスレーション・スタディーズ）のアプローチと英米文学受容研究に接合するという方法論から、大正末から昭和初期にかけて出版されたいわゆる「円本」が牽引した文学翻訳と受容について考察した。その結果、円本における翻訳出版は、文芸の大衆化という狙い・その牽引をアカデミズムに担わせる矛盾とも見える意識・出版社側による翻訳生成への積極的介入という特徴を見いだした。出版社側が、アカデミズムが主導していた当時の翻訳状況を利用しながら、大衆化という旗印の下で、翻訳観・外国文学観の形成に周到に介入しながら翻訳受容を牽引しようとした様相を明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：By applying an approach of translation studies focusing on paratexts around translated texts to the study of the reception of foreign literature, this research explores literary translation in the 1920s led by the publication of 'Yen-pon', a series of selected literary works sold at one yen apiece.

Publishers of yen-pon had the following intentions: to popularise literature and to expand its market for ordinary readers; to employ the original-oriented and academic attitude toward foreign literature to enlighten the readers; to consciously intervene in the process of translating and in the construction of translation norms led at the time by academism. In short, yen-pon publishers, by seemingly contradictory attitudes toward translation between reader-oriented and source-oriented policies, attempted to introduce different norms and modes of receiving translated literature.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学　英米・英語圏文学　比較文学　翻訳研究

キーワード：翻訳研究　翻訳学　トランスレーション・スタディーズ　外国文学受容　翻訳文学　円本

１．研究開始当初の背景

文学が作家やテクストの芸術性だけの問題ではなく、社会や文化といったコンテクストの問題でもあることは既に主張されてきた。外国文学受容の最前線である翻訳を主題化する場合、同様の視座を共有するのが翻訳研究（トランスレーション・スタディーズ）において近年顕著になっている目標文化の社会文化コンテクスト志向のアプローチである。しかし、このような共通の視座にもかかわらず、日本の英文学研究は翻訳研究との接点を積極的に持ってこなかった。そのため、翻訳研究のアプローチを英米文学研究と接合し、従来は重視されていなかったと考えられる翻訳のコンテクストとの関連に着目することによって、日本の英米文学翻訳受容を再検討する必要性を認識した。

また、それまでの自分の研究を通じて明治以降の英米文学翻訳規範を考察していたが、大正末から昭和初期の状況に関してはさらに考察を深化させる必要性も認識していた。この時期は、西洋を受容する態度が確立した明治大正期と、その態度に変化が見いだせる戦後との中間に位置しており、通時的に翻訳と外国文学受容の様相を把握するためにも、この時期の分析を深化させることは不可欠であると考えていた。

以上の背景から、本研究の着想に至ることとなった。

２．研究の目的

（１）本研究は、翻訳を受容する側の文化・社会の問題として主題化する翻訳研究（トランスレーション・スタディーズ）のアプローチを英米文学研究に接合し、翻訳のコンテクストとの関連という新たな視座から日本における英米文学の翻訳受容を再検討するとともに、日本の英米文学研究の視座拡大の一助となることを目指すものである。

（２）具体的には、明治～大正初期の外国文学受容の確立期と戦後の同受容の状況の大きな変化への通過点として大正末から昭和前半の外国文学受容を考察対象にし、以下の点を明らかにすることを目指した。

①翻訳による英米文学がどのように翻訳受容されたか、

②翻訳する側はどのようなシステム、イデオロギー、志向、翻訳観を持ち、それが実際の翻訳受容にどのような影響を与えたか。

特に、大正末から昭和初期は円本全集や文芸雑誌の出版が相次ぐなど、文学をめぐるコンテクストが既に明らかになっており、そうした先行研究を本研究での翻訳の考察に十分応用することができる。また、戦後の翻訳受容への考察に今後有機的につなげていくためにも、この時期の翻訳受容について詳細な理解を深めておくことを目指した。

３．研究の方法

(1) 方法論と概念の整理

大正末から昭和初期の文学翻訳受容を分析するに際し、翻訳のコンテクストに着目し、翻訳受容の背後にどのような意図や志向、翻訳観があったかを明らかにするという研究課題に即し、社会文化的なコンテクストを分析する方法論や概念を再度整理した。

①　翻訳規範概念と記述的翻訳研究

当時の翻訳がどのような意図や翻訳観に沿って生成され、受容を促されていたのかを考察する上で、翻訳規範という概念に依拠するのは有用である。翻訳規範とは、一定の時期と状況下で適切な翻訳とはどうあるべきかという指針となるものである(Toury 1995)。ただし、トゥウリーの概念分類では必ずしも日本の翻訳受容の分析に適切ではない点があることを確認し、本研究に即した形で概念を再設定した。

この規範を抽出する方法論として頻繁に用いられる DTS は、実際にどのような翻訳が行われているのかについての記述によって、実際の翻訳状況を考察するための方法論であり、主として翻訳テクストの分析を中心としている。本研究では、翻訳のコンテクストに着目したため、翻訳外のテクスト（翻訳書評、翻訳論、訳者解説、広告、読者のコメントといった様々な翻訳限言説）を分析対象にして DTS を応用した。この方法によって、出版社側がどのような意識や方針を持って翻訳を出版していたか、どのような受容を想定していたかについての分析が可能になる。

②　パラテクスト、翻訳書評の研究

上述した翻訳テクストの外部で生成される翻訳言説は、ジュネット(1987)が提唱した文学作品のパラテクストと見なすことができる。ジュネットによれば、文学作品には「テクストのより正しい受容とより妥当な読みのために大衆に働きかける」パラテクストが付随するのであり、それは「世界におけるテクストの存在とその『受容』および消費」を保証する（ジュネット 1987=英 1997=日 2001: 11-12)。つまり、パラテクストによって読者がある作品に対する予断を抱き、それが作品評価や購買意欲にさえ影響を及ぼすことがあるだろう。翻訳文学に関していえば、パラテクストに翻訳についての言説が含まれていれば、読者がそれに基づいて自分の翻訳観を形成する場合もあり得るだろうし、またはそこに提示される言説がその時代に一般的な翻訳観と一致するかどうかで作品の評価も変わり得る。こうした作用が外的な翻訳規範形成を担っていると考えられるため、パラテクストの分析は本研究の有効な考察対象

である。実際、翻訳研究の分野においても、パラテクストの例として翻訳書評を取り上げる考察が顕著に見られるようになっており、その分析対象としての重要性が議論されている。

（2）翻訳言説の分析

大正末から昭和初期にかけて出版されてブームとなったいわゆる「円本」全集の中でも、58 万部という大部の読者を獲得した新潮社『世界文学全集』を中心に、近代社『世界戯曲全集』・第一書房『近代劇全集』も含め、外国文学の円本の新聞広告や月報に掲載された文学論や翻訳論を言説資料として用いた。こうした広告や月報には多様な言説が含まれており、そこにはパラテクストとして翻訳の背後にある様々な意図や方針、翻訳観が表明されている。こうした翻訳の背後にある意識を言説の分析を通じて抽出することで、円本出版における翻訳規範を措定した。

４．研究成果

研究初年度は、改造社『現代日本文学全集』『世界大衆文学全集』・新潮社『世界文学全集』・近代社『世界戯曲全集』・第一書房『近代劇全集』について、その新聞広告や月報を全て読み、翻訳論や文学論などに言説を分類し、その内容分析と検討を中心に行った。

二年目はそれらの分析の学会発表に向けた分析内容の整理および方法論や概念の再整理を行った。それをもとに、テクスト研究（国内）、翻訳研究（国際学会）、日本文化研究（国際学会）の各分野の学会での発表を行った。各分野において研究内容の新規性と意義を確認するとともに、各分野の研究者から様々な観点に基づく有益なフィードバックを得た。

最終年度は、過去 2 年の研究内容にもとづいて研究の総括を行った。その結果、下記の成果を得ることができた。

（１）方法論に関しては、従来翻訳テクストを中心的な分析対象とする記述的翻訳研究アプローチを周辺の翻訳言説の考察に援用するとともに、近年翻訳研究で注目されているパラテクスト概念を援用した研究とも接合することで、翻訳受容のコンテクストに焦点を当てる観点からの文学研究のアプローチとして再構成する可能性を提示することができた。翻訳研究と文学研究を接合し、文学の翻訳受容を再検討するとともに日本の文学研究の視座拡大を目指すという本研究の目的に照応し、一定の研究成果を提示することができたと考えている。

（２）円本月報に見られる翻訳言説を中心とする分析を通じて、円本が主導した昭和初期の翻訳受容の背景にある意識、翻訳観、方針などの把握が可能となった。なお、主たる考察対象は、特に購読者数が多かった新潮社『世界文学全集』の月報とし、必要に応じ近代社や第一書房の円本月報も含めた。

翻訳言説の特徴として、次の三点を措定した。

①外国文学の大衆化という狙い
②大衆化の牽引をアカデミズムに担わせる矛盾とも見える意識
③翻訳論を含めた出版社側による翻訳への介入

①については、円本の出版広告や内容見本などに明確な方針が提示されている。従来の文学および翻訳出版のあり方が一般大衆と乖離していたことが指摘され、従来のアカデミズム主導の翻訳姿勢とは異なる読者志向の翻訳方針が主張されるようになった。これには当然ながら、円本の嚆矢である改造社版円本が示した「文学の大衆化」という方針がもたらした、文学出版市場の大規模な拡大という商業的な成功に、外国文学の円本出版社も追随した姿勢を読み取ることができる。従来のアカデミズム主導の翻訳に対して、商業ベースの翻訳方針が新たに示され、翻訳規範が交渉された実例と考えることができるだろう。

②については、上記①の方針と一見矛盾するのだが、大衆に外国文学の翻訳を提示する際に学究的な姿勢を伴っていたことが、円本月報の言説から読み取ることができた。学術的な作品解説に加えて、翻訳は極めて原典志向であり、それを受容する読者にも、難解であったとしても原典を忠実に理解することを求める姿勢が顕著に見られた。こうした分析からは、外国文学の円本の場合、「大衆化」というスローガンには、文学を大衆に近づけるという方向性ではなく、円本広告に謳われているように、「世界人」となるべく大衆を世界文学によって啓蒙することによって、大衆と外国文学を近づけるという意図が背景としてあったことを読み取ることができた。

③については、上記①②の一見矛盾する外国文学出版方針は、出版社（特に新潮社の場合顕著である）側の翻訳への積極的介入の理由として説明することができる。すなわち、出版社は「翻訳の大衆化」というスローガンの下で、大衆に普及する翻訳を出版し、この翻訳出版の商業的な成功を実現する意図がある。それと同時に翻訳の質を保証することを謳い、つまりそれは世界人として世界を読者に理解させるべく啓蒙的な価値を伴った翻訳を提供することを意味していた。それを実現するためには、アカデミズムの学問的権威と姿勢によって正確に読者を文学に近づけるように誘導する必要がある。その一方で、それまでの衒学的なアカデミズム主導の翻訳では一部の学究的な読者にしか理解され

得ず、翻訳の普及のためには不十分であることを述べ、大衆向けの翻訳を新たに購入してもらう妥当性を強調する。大衆化と啓蒙という矛盾する二つの目的を達成するためには、出版社がそれまで翻訳を牽引していたアカデミズムに介入し、その学問的権威を借りながら、大衆に普及できる翻訳を作り上げるためにコントロールすることが必然だったのであり、出版社側が大衆とアカデミズムの両者に対しての矛盾を解消する方法として介入したと捉えることができる。

このように、アカデミズムが主導していた当時の翻訳受容に、大衆化という旗印を巧みに利用しながら出版社側が周到に介入していくという、過去の文学翻訳のあり方とは一線を画そうとする円本における翻訳の様相の一端を明らかにすることができたと考えている。

（3）文学全集に関わる考察が文学受容の様相の解明に有効な視座であることを明確にできたことも、本研究の成果の一つである。ダムロッシュ(2003)は、世界文学とはそれを読むモードであると提唱しているが、その中で文学全集・選集が以下にモードを決める役割を果たしたかが論じられている。彼の観点を援用することで、昭和初期の円本にはどのように世界文学を捉えるモードが作用していたのか示唆を得ることもできた。この点は、昭和初期の円本だけではなく、それ以前の研究叢書および以後の文学全集などにも考察対象を広げて、外国文学受容研究の継続につなげていく可能性を確認することができた。

以上の成果から、文学研究と翻訳研究の両者に対して新規の示唆を提示することができたと考えられる。文学研究においては、これまでは原典の考察が中心で翻訳研究のアプローチと接合した研究は多くなかったが、本研究によって、円本を例に、翻訳のコンテクストが受容にどのように影響したかについて、従来主流であった作品分析やテクスト論とは異なる視座から新たな成果を提示することができた。

円本全集の研究にとっても、日本文学の場についての考察が中心だったこれまでの研究成果に、外国文学受容という観点から新たな考察結果を提示できたことの意義は大きいと考えている。

また、日本ではまだ文学翻訳のコンテクストをトピックにした翻訳研究はまだ少ない中で、一つの事例を提示できたことは、今後の同様の研究に向けた足がかりとなる重要性を持つと思われる。

さらに、翻訳研究が欧米での研究や近年大きく展開しているアラブ圏や中国語圏の事例研究が中心となる中で、それらとは全く異なる日本独自の事例によって翻訳研究に新たな知見を付与できたことにも意義があると考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）

① 佐藤　美希「円本と翻訳文学規範」『翻訳研究への招待』12 号　査読有り（日本通訳翻訳学会　翻訳研究育成プロジェクト発行電子ジャーナル）　2014　［掲載決定］
http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/

〔学会発表〕（計　５　件）

① SATO, Miki, ‘Yen-pon Boom and Literary Translation in the Early Showa Era’, British Association for Japanese Studies Conference 2012, 7 September 2012 (University of East Anglia, UK)

② 佐藤　美希「円本と翻訳文学受容」　テクスト研究学会　2012 年度大会　シンポジウム、2012 年 8 月 31 日（甲南女子大学）

③ SATO, Miki, ‘Reception of Foreign Literature by General Readers in 1920s' Japan: Publishing Policy of “Yen-pon” Collections of Translated Foreign Literature’, 4th Conference of the International Association for Translation and Intercultural Studies, 27 July 2012 (Queen's University Belfast, Northern Ireland, UK)

④ 佐藤　美希「昭和初期円本を通じた英米文学受容」　日本英文学会北海道支部第 56 回大会　文学部門シンポジウム「個別の受容から迫る『日本の英文学受容』」、2011 年 10 月 2 日（札幌学院大学）

⑤ 佐藤　美希「昭和初期における“円本”と外国文学翻訳をめぐって」　日本通訳翻訳学会第 12 回大会、2011 年 9 月 11 日　（神戸大学）

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤　美希　（SATO, Miki）
札幌大学・地域共創学群・准教授
研究者番号：50507209